

話は少し横道にそれますが、南京事件の時の中国領事は森岡領事で、約百名の日本人が南京にいました。ここに入り込んできたシナ兵（半分は共産勢力）が、すごい暴れかたをしたのです。森岡領事が病気で寝ている寝室にまで入り込んできて、領事の目の前で奥さんを強姦するのです。南京にいた日本人は裸にされたり、略奪されたり、強姦されたりします。領事館の物はことごとく便器まで奪い取られてしまいます。日本人の自宅も焼き払われ、ぶち壊されます。続いて同じ年の八月「済南事件」が起きます。この済南には、日本人は一八一〇人いました。その内、女性が八二九人です。これがことごとく凌辱され、暴行を受け、略奪を受けたのです。死亡は二人、負傷して入院した日本人は約四〇〇名です。

シナの漢民族というのは日本民族とは違って、食人風習（カニバリズム）の伝統を持つ人種なのです。人肉を食べるのです。ですからただ人を殺すのではなく、鼻を削ぎ、耳を削ぎ、腕や脚を切って五体をバラバラにする、生きながらに顔の皮を剥ぐ、お腹を裂いて腸を出す、目をくり抜く、足を片方ずつ馬にくくり付けて裂く……。これらはみな刑罰の種類として明記してあるのです。日本人には考えられない暴虐が平気で行われるのです。

これが実際に行われたのが、この時の南京事件、そして済南事件や通州事件です。通州では三〇〇人からの日本人が、そのような酷い目にあい、事件後に現地を視察した人が目も当てられない光景だったそうです。日本人の手や鼻にワイヤーを通して、街中引きずり廻すなど平気で行われたそうです。

くわしくは後述しますが、教科書で日本軍が南京で大虐殺を行ったと書かれている例の「南京事件」、これを朝日新聞に連載したのは本多勝一氏の『中国の旅』ですが、南京で日本軍が中国人を殺したという記述の中に、いま述べたようなことを日本軍がやったと書いてあるのです。中国人が自分たちのやる慣習や歴史やってきたことを、そのまま日本人がやったというように話して、それをそのまま本多氏は書いています。日本人はどのような殺し方は決してしません。そういう歴史もあります。お父さんが娘とセックスをする、兄妹がセックスをする、これをさせて日本軍は喜んだと『中国の旅』に書いてありますが、これは中国人がよくやる習慣であって、日本人はこんなことをやって喜ぶようなことはありません。中国には昔は人を煮て食べるという習俗があったのです。つい最近も中国で、山中ではぐれた人が死んだ仲間を食った、という報道がありました。これは歴史の一端が覗いただけなのです。とにかく民族の残虐性が違うのです。そして、この残虐なシナ民族の中でも特に暴虐な共産勢力が北上して、満州の張学良と合体するのです。